

彙報

教育學會例會

九月二十五日新入學生の歡迎會を開く。席上次の講演あり。

新しき村の視察談

小西博士

實業補習學校の施設に就いて

岡谷弘氏

岡谷氏の提出したる問題に就いて盛んなる討議ありき。

新著紹介

ルカ 方法省察原理 文學士 出 隆 譯

本書はデカルトの哲學上の主著「方法叙説」「第一哲學の省察」(「哲學原理」の三書について、前二者の全部と「哲學原理」の第一部(人間の認識の原理について)との翻譯であつて、續次刊行さる可き「哲學名著叢書」の第一篇をなすものである。翻譯は悉く原著から、即ち「方法叙説」は佛蘭西文に據り他の二著は羅典文に據つて譯せられてある。

近代の哲學に於けるデカルトの意義は改めて説くまでもない。近代歐洲の哲學を貫く最も根強い流れの幾つかがデカルトに源を發し、或は少くともデカルトに於て明確な形をとつたことは一般に認めらるる所である。苟くも近代の哲學を理解しようとするものは必ずこの根源を探らなければならない。併しデカルトの哲學の意義は、それが過古に於て歐洲の哲學思想の形成要素をなしたと云ふ歴史的な意義に盡きるものではない。その「メデイテーシヨ

ン」を読むものは、その人が深く根本にかへつて考へようとする人である限り、彼自らの問題がそこに異常な透徹さと力強さとを以つて取扱はれてゐることを見るであらう。云ふまでもなく、意識體験の自證的確實性を基礎としてその上にデカルト自身の進めて行つた考察の全體について見れば、我々のそのままに受け容れ難いものが少くないであらう。併しかかる假定はデカルト自身の、少くとも一面の根本思想なり傾向なりの充分徹底せられなかつた結果であるとも考へるのであつて、我々は必ずしもこれ等の假定を共にすることなくして彼の哲學の根本精神を我々に於て生かし得ると思ふ。それについて唯一例に過ぎないが、近時徹底的に内省の上に哲學を組織しようとするフッサールの現象學的考察に著しくデカルトに接近した所のあることなども興味のある事實だと思ふ。とも角もデカルトは近代哲學の理解のために必ず潛らなければならぬ門である。歐洲哲學の根本的な理解に對する要求が著しくなつたと云はるる現今のわが國の讀書界に於て、本書の如きはまさに出づ可くして出でたものと云つていい。而して我々の親しみにくい原著が語學に造詣の深い譯者の、充分な用意と努力とによつて我々に近づけられたことは喜ばしいことである。

一のクラシックを邦語に移すことはいかなる場合でも容易ならぬ仕事である。いまこの出氏の翻譯はいかなる出来ばえを以てこの困難をきりぬけてゐるか。語學の力が薄いのと歴史的な知識に乏しいために、自分はそれについて力ある意見を述べ得ない。たゞ讀過の際感じたままを述べれば、出氏の譯は原文の微細な語句にまでも綿密な注意が拂はれて、それが柔軟性に富んだ譯筆によ

つて可なり忠實に再現せられてある。たゞあまりに原文の文字に拘つたためか、リテラリに忠實な譯でありながら全體としての原文の意味がやや稀薄にされ、文章の中心が捉へにくくなつた箇所がないでもないようである。しかしかかる翻譯に於て譯者の自由を用ゆることに伴ふ危険を思へば譯者の態度は充分に是認す可きであらう。且前述の非難の當ると思はれるのは譯文の極めて僅少の部分であつて全體としては忠實な翻譯として信頼していいのだと思ふ。

なほ本書には附録として極めて氣のきいたデカルト略年譜と親切な譯者の附註及索引が添へられてある。(三宅朝一)

天臺宗綱要

文學博士 前田 慈雲 著

天台教家の誇りとし殆ど現存日本佛教各派教義組織の一大原因と考へられた五時八教の判釋も今日吾人のなしたつある批評的研究の前にはその權威の幾何かを失ふ事は止むを得ざる事實である隨つてその判釋によりて以て組織立てられたる天台教理も佛教そのものの批評的研究の立場より見れば時に牽強捏造に互るの親なきにあらざる事も亦止むなき所である。然れども他面天台それ自身としてその教理の高妙深奥なる事尋常普通の經論疏釋の文字音句の上に於ては到底その法義を開示し理致を釋顯する事能はざる所がある。茲に於てか天台列祖、彼等の以て佛教とし佛教精神と見たるもの、それ等の宣傳のために自己證得の法門を經論文句の上に寄せ、文字を離れずして文字外の旨趣を扶出し、言句を離れずして言句外の義味を開發せんとし、字訓、字象、轉聲等の釋に

よりて深奥の理致を手近に開示して人をして會得し易からしめ以て自家の教理を組織立てたといふ活手段の上より見れば、たとへそれに多少の牽強ありとしても實に巧妙靈活、茲に天台教理は佛教々理史上一大偉觀たるの資格と權威と永久不磨の生命とを得たのであるといふ事は疑ふ事が出来なないと思ふ。

本書は是の如くにして開創せられ、支那より日本に傳來し、日本天台を成立せしむるに至つた教理教會變遷發達の跡を尋ねその教理内容の概要を摘んで教理行果の四門を説き、教相觀心の綱要を說明し、最後に法華三大部の要領を提示し、尙初學門に入るの針路をも示され、頗る親切丁寧を極めたものである。天台宗綱要として恰好の書であると思ふ。

而してその歴史を説き、その教儀を論ずる、誠に考證該博にして適確、この種の書として動もすれば陥り易き宗派的偏見なく、第三者の地位に立つて公平に論述紹介されてあるといふ事は本書の一特長であり、讀者を利益する事の尠少ではない事を感ずるのである。

尙附録として天台教理及びその歴史に關係せしめて、佛性論、感應論、涅槃論、天台の親境に就て山外及日本天台の異説、天台念佛論の一斑、日本佛教の大系、日本天台の淵源、台密東密の淵源、讀史餘談の九種の論文を載せられてあるが、それに依りて吾人は一面天台教理を側面的に觀察する事が出来、他面他宗他派生起の顛末及び兩者關係の次第をも略ぼ知る事が出来る。余は本巻よりも寧ろこの附録に於て一層興趣多かりし事を附言して置きたい。

東京丙午出版社發行、和裝上下十二册、定價貳圓。(本田義英)